

新聞報道における女性アスリート表象の変化

法学部政治学科 4年C組

学籍番号 31252538 大西菜穂

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究の整理	4
3. 内容分析	6
高橋記事の分析	7
浅田記事の分析	15
4. 考察	27
5. おわりに	29

1. はじめに

2013年9月、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定したことはまだ記憶に新しく、オリンピックに選手やサポーター、観客として参加しようと考えている人々のみならず日本国民の誰しにも影響を与えたニュースとなっただろう。それは、オリンピックをスポーツの競技的側面だけで評価する人はいないだろうからだ。それでは、我々が評価するスポーツの他の側面とは具体的に何か。そんなスポーツの持つ広い影響力をオリンピック憲章が分かりやすくまとめてくれている。以下、憲章を一部抜粋する。

1. オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。
2. オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立てることにある。
4. スポーツをすることは人権の1つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。

(日本オリンピック委員会サイトによる¹⁾)

ここから分かるのは、スポーツは教育、文化、政治、さらには人類そのものの発展に寄与する役割を持つということである。

国際レベルでこのようにスポーツの社会的役割が示される一方で、日本の国内レベルでの指針を見ておきたい。政府の政策をここでは参照する。文部科学省のスポーツ・青少年局では、スポーツ基本法の規定に基づき、平成24年3月に「スポーツ基本計画」を策定している。「スポーツ基本計画」とは、文科省のサイトによると「スポーツ基本法の理念を具体化し、今後の我が国のスポーツ施策の具体的な方向性を示すものとして、国、地方公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体となって施策を推進していくための重要な指針として位置付けられるもの」である(文部科学省スポーツ・青少年局サイトによる²⁾)。その「スポーツ基本計画」によると、第1章では、スポーツの担う「青少年の健全育成や、地域社会の再生、心身の健康の保持増進、社会・経済の活力の創造、我が国の国際的地位の向上等国民生活において多面にわたる役割」を踏まえて、「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会の創出を目指していくことが必要」であると示している。第2章では、今後のスポーツ推進の基本方針として、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」を基本的な政策課題として挙げている(「スポーツ基本計画」(概要)による³⁾)。

したがって、国際レベルと同様に日本においても、スポーツを通して多様な価値を創出すること(第1章)、多様性のある社会を目指すこと(第2章)が掲げられている。

しかし、オリンピック開催も前にして、こうした理想的なスポーツのあるべき姿を人々が描きつつも、実際にこれらの計画内容は実現できているだろうか。特に第2章に関しては、基本的人権に直接関わる問題であるが故に深刻である。「年齢や性別、障害等を問わず」すべての人々に対して、スポーツの機会が平等に与えられるようにするということは、言い換えれば、スポーツには、高齢者、性別でいえば女性、障がい者、いわゆる社会的弱者として位置づけられる人々に着目し、彼・彼女らが被る不利益を是正する役割があるといえる。たしかに、こうした不利益を国・地域レベルやNPOで解決してきた例は存在する。しかし私はここで、スポーツにおける女性の不利益、いわゆるジェンダーの問題に注目したい。なぜなら、高齢者や障がい者に関しては、彼らが弱者であった際の対照

¹日本オリンピック委員会「オリンピック憲章 2014」
<http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2014.pdf>

²文部科学省「スポーツ基本計画 平成 24 年 3 月」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319359_3_1.pdf

³同上

となる若者や健常者と比較されることはあっても、問題は明確化させやすい。一方、ジェンダーの問題に関して厄介なのは、女性のスポーツにおける不利益は問題視されにくい性質を持っていることである。というのは、スポーツはそれ自体が男性性を帯びるほど、その対照である女性の存在が小さく映るという問題をはらんでおり、気付かないうちに両者の差が生まれていることがあるからである。つまり、問題視されないことが問題なのである。

このスポーツにおけるジェンダーの問題を本論文での軸とする。Ⅲ以降で詳しく論じていく前に、まずはジェンダーの定義付けとスポーツに関わる背景、そして本論文を書くこととなったきっかけと問題意識について触れておく。

飯田 (p.11, 2004) は、ジェンダーについて、「社会的・文化的に作られた性差」と定義している。一方、ジェンダー・フリーについては、「社会的・文化的性差に対する偏見や先入観から自由になること」と定義している。しかし、このように国をあげて、スポーツにおける機会の平等・差別の是正が課題として掲げているにもかかわらず、スポーツにおけるジェンダーのイメージは長い歴史をもって社会全体で作りあげられてきた背景があり、「スポーツにおけるジェンダー解放への道程は険しくて遠い」と指摘している (飯田・井谷, p.19, 2004)。日本では昨今、男女雇用機会均等法や男女共同参画社会基本法が制定され、女性の社会進出を目指した取り組みが多くなされるようになった。だが、スポーツにおいては、未だに男性の優位性が強く見られる。男性の優位性というのは、身体的なものではなく、ジェンダーイメージによるものである。有馬 (p.111, 2012) は、スポーツが本当に男らしさの象徴なのだろうかという疑問を出発点に女子大学生に男女アスリートに対するイメージ調査を行ったところ、アスリートはその性別に関わらず、男性性が高い人たちであるという結果が明らかになった。有馬によると、「スポーツは男性の領域との思い込みが存在し、それは女性アスリートのイメージにも影響している可能性がある」と指摘する (有馬p.112, 2012)。これでは、女性のスポーツへの参加機会の減少に繋がりがかねない。

上記の参加機会の減少にも関連するが、次に本論文を書くきっかけの一つとなった自身の経験について述べておく。私自身、これまでスポーツと長く関わってきた中で、男女間の社会的性差を感じる事が多くあった。小学校の頃野球観戦が好きだったことから、自分も野球を習ってみたいと思ったこともあったが、その頃は女子が野球をやる風潮はほとんどなかったために周りの目を気にして断念した。野球は男性のスポーツだと周りからは捉えられていたためである。こうした日常において、性役割の意識にとらわれ、自分の意思に基づいてスポーツができないことは、多様性を実現出来ているとは言えないだろう。このように、無意識に我々の中にジェンダーのイメージが刷り込まれてしまっている要因は、学校や家庭などの環境のみならず、メディアの取り上げ方も影響していると考える。送り手であるメディアは、公共性と視覚的な情報を強みとして、受け手である人々に自然とその情報を受け入れさせてしまう。今では、女子ワールドカップでのなでしこジャパン、侍ジャパンの女

子代表等の活躍もあり、それらが男性性の強いスポーツと捉えられることは以前に比べると少なくなった。女性のスポーツとしても認められ始めたのである。おそらく、今もし私自身が小学生に戻れるとしたら、サッカーや野球を何のためらいもなくやっているかもしれない。一方、フィギュアスケートやバレーボールのような女性性の強いスポーツは、女性的な表現で過少評価されがちである。このように、スポーツにおけるジェンダー意識がメディアと結びつくことによって、その競技自体や競技の“男らしさ”や“女らしさ”に対する私たちのイメージが強化される。スポーツは身体的な活動であるから、そこを性別で分けるのは当然といえるかもしれない。しかし、それは生物学的な問題であって、ジェンダーの問題とは別で考えられるべきである。問題なのは、“女性だから”、“男性だから”という理由で、身体的な区別以外での差がつくられていることにある。男らしさ・女らしさで男女を二分することによって、スポーツをする機会を失ってしまうのはおかしい。たしかに、先述したサッカーや野球における男性のスポーツというイメージからの脱却は、プラスの変化と言えよう。しかし、メディアにおける女性アスリートに対するステレオタイプの表現は未だに多く存在することを次章の先行研究のレビューにおいて指摘したい。

2. 先行研究の整理

飯田(p17-18, 2008)は、近代スポーツが性の平等を受け入れず、一般／標準を男性として、そこからはずれた特殊、下位の女性を構築してきたことを指摘している。近代スポーツは、「男子マラソン」と「女子マラソン」、「サッカー」と「女子サッカー」、という風に、性の二分割を当然のこととして行ってきた。スポーツ・ジェンダー学の立場から見れば、男性種目と女性種目に分割されているのは、生物学的理由からでもなく、女性のスポーツを保護する理由からでもなく、男性の優位性、ジェンダーの階層性を堅持するためであるという。また、“男らしさ”や“女らしさ”が明確である競技に関しては、メディアはより好んでジェンダー的な描写を行う。メディアは、男女間の性差をあたかも自然なものとして描写する。

では、具体的に女性アスリートは私たちの目にどのように映っているのか。有馬(p.117-128, 2012)は、マスメディアが描く様々な女性アスリート像を以下の項目でカテゴリー化している。(1)「女性冠詞」を伴う表現が多い女性アスリート、(2) 女らしさから逸脱する女性アスリート(彼女らが女らしさを備えていないことを強調することで、逆に女らしさに関するステレオタイプも強化してしまっている)、(3) マドンナ、ヒロインとしての女性アスリート、(4) 妻や母親としての女性アスリート、(5) 男性に守られ導かれる女性アスリート、の5つである。森田(p.95-96, 2009)も同様にメディアの女性アスリートの描き方を批判的に見ている。(1) 女性アスリートの「幼児化」「性愛化」、(2) 女性アスリートとその業績の「周縁化」、そして(3) 女性アスリートとその業績の「矮小化」、の3つである。これらはすべて、女性アスリートの能力を過小評価するものであり、スポーツ報道の対象の中心である男性の描き方とは大きく乖離したものであるといえる。

実際に、メディアの報道に関するジェンダー表象の分析は既に先行研究で多くなされてきている。飯田(p.216, 2001)は、シドニー五輪における新聞記事の女性アスリート報道についての内容分析を行った。飯田は、五輪期間中の新聞3紙について、記事面積と写真面積を性別・競技種目別に算出した。その結果、報道量は男性アスリートに関するものほとんど変わらなかったが、競技種目についてはジェンダー・ステレオタイプが強く見られること、女性記事なかでも女性専有種目に写真が多く扱われることから、メディアを通してスポーツがジェンダーの再生産装置の役割を果たしていることが明らかになった。しかし、これらは量的分析であるため、メディア内のどこでどのようにしてジェンダーが構築されていくのか、あるいはオーディエンスに何をメッセージとして伝達しているのかについては十分明らかにされていない。そこで、飯田(p.4-14, 2003)では、一人の女性アスリートのキャリアに焦点を当てることによって、より具体的な質的分析が行われた。見出し、本文、記者、写真、キャプション、撮影者のすべてにわたり、大会、新聞社、発行所、掲載面における比較、および見出しと本文との関係を通じて、ジェンダー構築の生成過程ならびにジェンダーに関するメッセージについて分析を行った。分析の結果としては、スポーツ界への女性の進出が推奨されている近年においても、新聞の見出しの分析から女性アスリートのスポーツキャリアが矮小化されて報道され、さらに女性競技者に対し、従来の固定的ジェンダー規範を補強する生成過程が示されたと結論づけている。

これらの先行研究のレビューから私が加えて提起したい問題は、近年における女性の社会進出や男性性の強かったスポーツへの女性の進出は、何らかの形で報道の在り方に影響を与えているのではないかというものだ。先行研究は、性差を助長しているメディアに対する批判という形でおわっていた。しかし女性の社会進出に関して言えば、報道現場で働く女性の数も増えたことは事実であるし、メディア側の姿勢も変わってきていると私は考えている。ニュース報道とジェンダーについて研究を行っている齊藤 (p.39-41, 2012) は、1975年から2010年までのメディア産業（テレビ局と新聞社）における女性の割合の変化をグラフに示している。このグラフによると、テレビ局と新聞社ともに男性が多数を占めているのが現状であるが、年々女性の占める割合は少しずつ高くなってきている。新聞社について見てみると、1990年以前は女性記者の割合は5パーセント以下であったのに対し、2010年には15.6パーセントまで上がっている。また齊藤は、「偏ったジェンダーバランスがメディアの伝える内容に一定の影響を及ぼしている可能性は十分考えられる」と述べている。これに関連して、岩崎・小玉（齊藤が引用している）は「男性がジャーナリストとしての訓練をつんでいても、女性の経験を完全に理解したり、その立場にたつてものごとを考えたりするにはおのずと限界があり、代わりは勤まらない」（岩崎・小玉, p.64, 1994）と述べており、女性が増えることによってニュースそのものに変化を与えることができると指摘している。このように、報道側の男女比の変化の事実を踏まえたうえで、報道の在り方の変化を見ていきたい。

スポーツ界への女性進出については、オリンピックにおける男女別の競技数の推移に関

するデータを以下の通り示しておく。内閣府男女共同参画局によると、1896年の第1回オリンピックの男性競技が8、女性競技が0であったのに対して、2004年には男性競技が26、女性競技が25となっている（男女共同参画白書 平成16年度版による）。身体能力のレベルではもちろん劣るものの、日本人のメダルの獲得数も近年のオリンピックでは男女ほぼ同数になっていて（男女共同参画白書 平成16年度版による）、女性アスリートの活躍は男性アスリートのそれに引けをとらなくなってきた。たしかに、井谷(2004)の研究にもあったように、女性スポーツの活性化がそのままジェンダー差別の解消につながるか否かについては懐疑的にならなければならないが、プラスに働いていることは少なからずあるのではないだろうか。

そこで私自身も飯田(p.4-14, 2003)の研究に倣って、新聞記事を取り上げ、女性アスリートの表象を実際に分析し、飯田の研究では焦点とはならなかった、女性アスリートに対して伝統的な女性役割を付与する報道の仕方からの変化が彼女らの表象に表れているのかを考察したい。そこで今回は、量的分析をするよりも、具体的な記事を一つ一つ質的分析をしていきたい。比較対象とする過去と現在の2人の女性アスリートがそれぞれどのように表象されてきたのか、そして2人の表象に見られる変化を明らかにしていきたい。

期待される考察結果は、少なからず女性アスリートに対する表象の内容は昔に比べて、現在では良い方向に変わってきているということだ。公共性のあるメディアが無意識のうちに生んだ人権の問題を、自ら解決する方向に向かっているという願いも込めてである。

3. 内容分析

分析対象には、過去のアスリートとしてマラソンの高橋尚子選手（以下高橋）と現在のアスリートとしてフィギュアスケートの浅田真央選手（以下浅田）を選んだ。両者を選んだ理由は、以下の2点である。1点目は、競技の特徴が似ていることである。マラソン、フィギュアは共に個人競技であり、女性性の強いスポーツとしてどちらも認識されている。2点目は、アスリートの特徴である。どちらも国民的アスリートと呼ばれるほどの実績を持っている。高橋は、シドニー五輪で日本人女子ランナー初の金メダルを獲得し、女子スポーツ界では初となる国民栄誉賞を受賞した経歴を持つ。浅田は、15歳にして初出場のグランプリファイナルで優勝、2010年のバンクーバー五輪では銀メダル獲得を成し遂げている。

浅田の新聞掲載数は他のアスリートと比べても多いことがわかる。一般にフィギュアのシーズンは、9月から翌年の3月頃であるといわれている。ソチ五輪が開かれた2013年度のシーズンでは、浅田の掲載数（地域面は除く）は朝日で213回、読売で226回である。それに対して、金メダル獲得の偉業を成し遂げた羽生結弦選手の掲載数は朝日で159回、読売で144回であり、数字的に見た際に両紙とも浅田には及ばない。

高橋の掲載数も同様に多い。シドニー五輪の開催期間である9月15日から10月1日の高橋の掲載数（地域面を除く）は、朝日で43回、読売で52回である。それに対し、シド

ニー五輪でアトランタ五輪に続く連覇を達成した柔道の野村忠宏選手の掲載数は、朝日で21回、読売で26回であり、高橋の約半分である。

内容分析を行うにあたっては、朝日・読売両紙の地方面以外の朝刊・夕刊の記事を対象とする。分析結果を示す前にまず、年表を示しておく(図表1)。そして、この年表に基づいて、「報道集中期」を選定し、分析結果を示す(図表2)。高橋の「報道集中期」は、金メダルを獲得したシドニー五輪期間とする。一方の浅田は、ジュニア時代から今も現役として長く選手を続けているため、2011年の全日本選手権を「報道集中期①」、ソチ五輪を「報道集中期②」、復帰後のGP中国杯を「報道集中期③」と3つに分けて分析する。

図表 1-1. 高橋の年表

1998年	バンコク・アジア大会マラソン1位(当時日本記録) 名古屋国際女子マラソン1位(当時日本記録)
1999年	世界選手権マラソン欠場
2000年	シドニー五輪マラソン金 名古屋国際女子マラソン1位
2001年	ベルリンマラソン1位(当時世界記録)
2002年	ベルリンマラソン1位
2003年	東京国際女子マラソン2位
2005年	東京国際女子マラソン1位
2006年	東京国際女子マラソン3位
2008年	名古屋国際女子マラソン27位

(「日本陸上競技連盟 選手名鑑」をもとに作成⁴)

図表 1-2. 浅田の年表

2002年12月	全日本選手権初出場7位 (女子公式戦初の3連続3回転に成功)
2004年11月	全日本ジュニア選手権優勝
2005年03月	世界ジュニア選手権優勝
2005年11月	国際大会シニアデビュー
2005年12月	GPファイナル初出場優勝
2006年02月	トリノ五輪年齢制限で出場できず

⁴「日本陸上競技連盟 選手名鑑 高橋尚子」<http://jaaf.or.jp/fan/player/wom025.html>

2006年12月	GPシリーズNHK杯初優勝 (世界歴代最高の199.52)
2006年12月	全日本選手権で初優勝
2007年03月	世界選手権準優勝
2008年03月	世界選手権初優勝
2010年02月	バンクーバー五輪銀
2010年03月	世界選手権優勝
2011年03月	世界選手権6位
2011年12月	母親死去、GPファイナル出場辞退
2012年03月	世界選手権6位
2012年12月	GPファイナル4年ぶり優勝
2013年03月	世界選手権3位
2014年02月	ソチ五輪6位
2014年03月	世界選手権3度目の優勝 (SPで世界歴代最高の78.66)
2015年11月	GPシリーズ中国杯優勝

(「浅田 真央オフィシャルウェブサイト」をもとに作成⁵⁾)

図表 2-1-1. 高橋記事の分析 (朝日新聞)

報道集中期 (シドニー五輪金) 2000年9月25日～10月2日				
朝日新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
9月25日	朝刊・社会	駆け抜けた 女子マラソン3選手(シドニー伝説 2000) 五輪	小出義雄監督(六一) = 積水化学 = が、念願の五輪金メダリストを生んだ。 (中略) 高橋選手の強さは「素直さ」からくるという。練習メニューを指示すると、忠実に従う。ほめると素直に喜ぶ。小出監督の指導の基本である「ほめること」にぴったり合った。	高橋自身の能力以上に、小出監督の指導力に焦点を当てている。

⁵⁾ 「浅田 真央オフィシャルウェブサイト」 <http://mao-asada.jp/>

	朝刊・五輪	高橋尚子、無限大 女子 マラソンで金 陸上 シドニー五輪	<p>(中略)</p> <p>「みなさんの応援のおかげだよ。酒飲みのへっぼこおやじでも、やれば世界一になれるんだねえ」</p> <p>17キロ地点で集団を振り切って飛び出したのも、すべて小出監督との事前の打ち合わせ通り。</p> <p>(中略)</p> <p>「本当の世界最強を決める大会」と話したのは小出監督。その中で、レースを脚本通りに展開させた。</p> <p>(中略)</p> <p>「17キロまでで体が軽かったら思い切って出ていい」。前半の展開の中で、それが小出監督の指示だった。</p> <p>(中略)</p> <p>小出監督は上り下りが続く32キロから35キロまでの場所を勝負どころと指示した。</p>	同上
	朝刊・総合	しなやかな強さ見せた シドニー五輪女子マラソン (社説)	<p>有森裕子選手も小出監督の指導を受け、バルセロナ五輪で銀メダル、アトランタ五輪で銅メダルを獲得した。彼女の口癖も「喜びを力に」だった。女性のしなやかな強さが引き出されているところに共通点がある。</p> <p>(中略)</p> <p>本当に輝くのは、彼女たちが妻となり、母親となった時な</p>	<p>監督の役目は、第二の人生のためのお母さん作りであると語る小出監督。</p> <p>また、泥臭さや努力を語らず、高橋は軽やかに、しなやかに、メダルを獲得したとしてい</p>

	朝刊・総合	高橋尚子、マラソン金 陸上女子では初 シド ニー五輪・第10日	<p>のだ」「その意味で、私は監督として選手生活を終えた後にやってくる第二の人生のために、素晴らしいお母さん作りをしているつもりなのだ」</p> <p>メダル狂想曲に巻き込まれることもなく、軽やかに、しなやかに、高橋選手は金メダルを獲得した。</p> <p>これが五輪史上最大の難コースと呼ばれた上り下りが激しいマラソンを制した女性なのか。けろりとした表情で、場内を一周した。</p> <p>(中略)</p> <p>この一年、引きずってきた影がある。昨夏、スペイン・セビリヤで開かれた世界選手権に出場できなかったことだ。(中略) 華やかな舞台の前で、主演女優は役を降りた。</p>	評価しつつも、あくまでも「女性」という枠で高橋を表象している。
	朝刊・総合	女子マラソン・高橋尚子 選手の金メダルのイン タビュー (天声人語)	<p>「当日の気象条件とかレース展開を想定するのは非常にむずかしい。その場になってみないとわからないので、臨機応変に走っていこうという気持ちです」「自分の体と相談しながら走っていくと思います」▼「臨機応変」とは、言うは易(やす)く行は難しの典型みたいなことばだ。その場その場に応じて適切な手段をとることは、凡人にはなかなかできない。それを気負いも</p>	努力家として評価

			なく淡々と口にできるのは、 過酷な練習でつちかわれた 洋々たる自負ゆえだろう	
10月2日	夕刊・社会	高橋尚子選手ら日本選 手団が帰国へ シドニ ー五輪	「(レース後は) ショッピング もできた。シドニーでは地図 がなくても歩けますよ」と笑 顔を向けた。	競技以外の話題に 触れている。

図表 2-1-2. 高橋記事の分析 (読売新聞)

報道集中期 (シドニー五輪金) 2000年9月25日～9月29日				
読売新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
9月25日	東京朝刊・ 五輪A	五輪マラソン優勝の高 橋尚子 「素晴らしい勝 負勘、伝説的な食欲…」 /NY紙	「レース後は彼女のもう一つ の情熱、食欲がわいてきた。日 本の陸上競技専門誌による と、タカハシは一度にすし4 0個、あるいは4ポンド (約 1・8キロ) のステーキをたい らげることが出来る。お祝い は何がいい?と聞かれたタカ ハシは『おいしいものが食べ たい』と答えた」と記事は結ん でいる。	五輪面での掲載で あるが、食欲の話 題を持ち出してい る。
	東京朝刊・	[シドニー五輪] 第10	小掛照二・日本陸連副会長「マ	陸連にとっての夢

	五輪 B	日 陸上 女子マラソンの高橋尚子が五輪新で「金」	<p>ラソンで金メダルを取るのは大変なこと。高橋選手はもちろん、見事に金メダリストを育て上げた小出コーチにも、特別な表彰と報奨金を考えたい」</p> <p>桜井孝次・陸上監督「陸上競技の金メダルはベルリン五輪以来のこと。メインスタジアムのメインポールに日の丸を揚げるのは、日本陸連にとって、長年の夢だった。それをなし遂げてくれた」</p>	という枠で語られている。
	東京朝刊・社会	シドニー五輪 マラソン金の高橋尚ちゃん輝く笑顔「もっともっと走りたい」	「すごく楽しい四十二キロでした」――。心から、そう口にした。高橋尚子（28）らしい言葉だった。その笑顔は、栄光をつかんだ誇りでもなく、五輪のプレッシャーから解放された安どでもなく、ただ、走ることができたという喜びで輝いていた。	“尚ちゃん”と表現している。
	東京朝刊・2社	シドニー五輪 女子マラソン・高橋が金メダル声援背に風になった	<p>「尚子、尚子」。沿道の良明さんは必死に呼びかけた。高橋選手はまっすぐ前を向いたまま、かけていたサングラスを右手ではずし、良明さんの方にほうり投げた。</p> <p>（中略）</p> <p>メキシコ五輪銀メダリストで九州女子短大教授の君原健二さん「最後までゆとりのある力強い走りだった。日本ではマラソンへの期待が大きく、</p>	<p>父親とのエピソードをクローズアップ。</p> <p>実力を評価するも、高橋の練習方法を環境の変化や時代の変化と捉えている。</p>

	東京朝刊・	[社説] 女子マラソン	<p>プレッシャーから『金』を逃した選手が何人もいた。高橋さんはむしろバネにして、実力を発揮した。それが素晴らしい。アメリカの高地での練習も効果的だったようだ。私たちのころは一般社員とほぼ同じ勤務だったので、長期不在となる海外はもちろん、国内合宿さえアマチュア精神に反する、と考えられていた。時代の流れ、環境の変化を感じる</p> <p>(中略)</p> <p>ノンフィクション作家の吉永みち子さん「高橋選手の走りを見ているとマラソンが好きだという気持ちが伝わってくる。あるマラソン選手から『五輪のレースで、勝てないと分かった瞬間、走れなくなってしまった』という話を聞いたが、高橋選手には、見ている方が苦しくなるような悲壮感がなく、ほっとする。好きだから走るという時代になって感無量だ。新しい時代を感じる。</p> <p>(中略)</p> <p>バルセロナ五輪銀メダリストでトヨタ自動車九州陸上競技部監督の森下広一さん「三十五キロ手前でシモン選手がふと油断したのを見逃さず、勝負に出た。作戦というより、天性のひらめき。</p> <p>小出義雄監督との二人三脚で</p>	<p>“好きだから走る”高橋の特徴を、時代の変化と捉えている。</p> <p>高橋が天才型の選手であるかのような表現。</p> <p>小出監督の力を強</p>
--	-------	-------------	--	---

	<p>三面</p> <p>東京朝刊・ 一面</p>	<p>日本陸上に歴史刻んだ 金メダル</p> <p>[編集手帳] 高橋尚子、 五輪マラソン「笑顔」の 金</p>	<p>作ったシナリオ通りにレース を組み立て、主役を演じきっ た。</p> <p>まだ無名だったころ、小出監 督に「お前は有森（裕子）二世 だ」と言われて、怒った。「私 は私で、きちっと高橋尚子の 走りをします」と。素直さに同 居するシンの強さを示すエピ ソードとして、同監督著「君な らできる」（幻冬舎）にある （中略） ひげの監督とともに歯をくい しばって耐え抜いてきた末 の、美しくさわやかな笑顔だ った。</p>	<p>調している。</p> <p>監督にも意見する 高橋の人柄が分か る記事である。 しかし、それと同 時に著書を引用し たり、“ひげの監 督”と愛称で表現 したりしているこ とから、監督と二 人三脚でやってき たことも強調して いる。</p>
	<p>東京朝刊・ 一面</p>	<p>シドニー五輪 マラソ ン・高橋、会心の金 陸 上日本女子で初</p>	<p>高橋は、ひたすら小出監督を 信じて走ってきた。 （中略） 当時、小出監督はマラソン専 門。慕って入社したのに、指導 はおろか、口をきくことも出 来ない。その年の冬、米ニュー メキシコ州アルバカーキでの 高地合宿のメンバーにילות もらった。そこで聞く監督の 言葉は意外だった。「それでい いんだよ。腕を前で振るから リズムが速い。マラソンなら 世界一になれるぞ」。コンプレ ックスのもとになっていた腕 の振り方を長所と言われ、う れしかった。</p> <p>“ほめ上手の小出”の異名を</p>	<p>監督に導かれる高 橋。</p>

	東京夕刊・ 夕一面	[よみうり寸評] 高橋尚子の「金」、長嶋巨人のV一昼夜の余韻	取る監督は振り返る。「高橋はだれかに教えてもらいたくて、のどがカラカラの状態だった。ちょっと水をやったらがぶがぶ飲んだ」。 土台に小出義雄監督との信頼関係がある。素直な性格で大いに食べる選手の活力と、的確にスパート地点を読む監督のシナリオ。走り大好き人間の師弟、二人三脚の勝利だった	同上
9月29日	東京夕刊・ 夕2社	シドニー五輪 日の丸なんて気にしない!? 伸び伸びと、選手気質様変わり	早稲田大時代に競走部で活躍した映画監督の篠田正浩さん(69)は、昔とは涙の意味も違うという。「涙を流すのは今も昔も同じだが、例えば高橋選手がゴール後に流した涙は、『日の丸』を見てではなく、小出義雄監督と苦楽を共にし、結果を出せたという個人としての涙」と話す。	国の代表として戦ったというよりも、小出監督と二人三脚で戦ったという意味合いを強調している。

図表 2-2-1-1. 浅田記事の分析 (報道集中期①、朝日新聞)

報道集中期① (母親急死後の全日本選手権優勝) 2011年12月25日~27日				
朝日新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
12月25日	朝刊・スポーツ	高橋、逃げ切ってV フィギュアスケート・全日本選手権 24日	悲しみを押し隠し、それでも前へ進まなければいけない。周囲も自分に期待を寄せる。そんな空気に押しつぶされそうになりながらも踏ん張った。	浅田の目線に立っている。

12月26日	朝日・スポーツ	真央、揺るがない フィギュアスケート・全日本選手権 25日	一流のアスリートとしての浅田の強さを感じさせるフリーだった。	“一流のアスリート”として評価。
	朝刊・社会	「お母さん、喜んでると思う」 浅田真央、全日本フィギュアV	練習スケジュールも佐藤信夫コーチと話して本人が決め、お弁当も作るように。 (中略) 母の期待にこたえ、堂々の滑りを見せた浅田選手。「気持ちを強く保って、スポーツ選手としてやるべきことをしっかりやれたと思う」。	親やコーチに依存することなく自立している浅田を評価。
	夕刊・総合	素粒子	悲しみを越えて次に進もうとする決意が浮かぶ。	悲しみを乗り越えた前向きな浅田を評価。
	夕刊・スポーツ	(ロケットトーク) 浅田選手、必ず大きくなる 清水宏保	今回のことで浅田真央という選手は一人の女性として、間違いなく成長していきます。	他のアスリート(清水選手)の言葉を取り上げ、客観的に浅田の成長を評価。ここでの“女性”はジェンダー的な意味で使われているわけではない。

12月27日	朝刊・スポーツ	浅田真央、「愛の夢」再び 大阪でフィギュアスケートアイスショー	来年の目標を「ステップアップ」と掲げた浅田。「今年はいろんなことがあったけど乗り越えられたので、自分の力に変えていきたい」	ーアイスショーでの質問であるが、来年の浅田への期待が込められていると考えられる。
--------	---------	---------------------------------	---	--

図表 2-2-1-2. 浅田記事の分析（報道集中期①、読売新聞）

報道集中期①（母親急死後の全日本選手権優勝）2011年12月25日～26日				
読売新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
12月25日	東京朝刊・スポB	フィギュアスケート・全日本選手権第2日 真央 動じずSP2位 高橋5度目V	浅田は、いつものように軽やかに舞い、のびやかに滑りきった。「練習通りに」と自身に言い聞かせ、ほぼミスなく滑り終えた。「ほっとしている。今、持っているもので、しっかり滑ることができた」と、何度もうなずいた。 (中略) 癒えるはずもない悲しみは、笑顔の裏に秘めた。順位や得点よりも大事なことは、今の力をすべて出し切ること。	悲しみを乗り越え、すべてを出し切った浅田を評価。
12月26日	東京朝刊・スポA	フィギュアスケート・全日本選手権最終日 女王・真央 復活	「完璧に近い状態まで来ている。次の試合では絶対に跳べる」と力強く語った。 冷静な判断で世界選手権の切符をつかんだ。「去年は満足じゃなかった愛の夢をパーフェクトに滑りたい」。悲しみを乗り越えた21歳は、休む間も	同上

	東京夕刊・夕二面	全日本Vから一夜 真央「ほっとした」	<p>なく、さらなる高みを目指す。 (中略) 浅田真央「SPはやはりいつもと気持ちが違い、どうなるかと思った。けど、フリーは集中して(自分を)信じてやる事ができた」</p> <p>12年に向けては「来年は、この(今年)の経験を自分の力に変えたい。テーマはジャンプのレベルアップ」と語った。</p>	さらに高い目標を目指す浅田の言葉を引用。
--	----------	--------------------	--	----------------------

図表 2-2-2-1. 浅田記事の分析 (報道集中期②、朝日新聞)

報道集中期② (ソチ五輪6位) 2014年2月20日~26日				
朝日新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
2月20日	夕刊・五輪	震える真央 フィギュアスケート・女子 SP ソチ五輪	原因は探しきれないままだが、前を向くしかない	いつもの浅田ではないから前を向こうという姿勢
2月21日	朝刊・五輪	真央、練習通りにいくはずが フィギュアスケート・女子 SP ソチ五輪	五輪初採用の団体があり、浅田は8日にSPを演じ、ここでも3回転半で転んだ。誰も経験のない日程だった。(中略)ただ、この日3位になったコストナーも団体に出ていたことを考えると、一概にこれが原因とは言いきれない。	変則的な日程を不調の原因とはしていない。(原因は外部的な要素ではなく、浅田自身にあると暗に示している。)

	朝刊・社会	(冬空に舞う) 真央、前を向いて 原点のバレエ、磨いた表現力 ソチ五輪	S Pで失敗したジャンプを繰り返して、自信を取り戻そうと必死だった	自信を取り戻してほしいとの願望とも受け取れる表現
	夕刊・1面	これが浅田真央、フリー自己最高点 女子フィギュア ソチ五輪	すぐに笑顔になると、手を振って会場の声援に応えた	演技の評価のみならず、周囲に感謝する様子を伝えている
	夕刊・五輪	「できる」の魔法 真央、3回転半 フィギュアスケート・女子フリー ソチ五輪	すぐに泣きやんでスタンドに向かってほほ笑んだ	同上
	夕刊・社会	(冬空に舞う) その笑顔、待ってた 真央「私なりの恩返しできた」ソチ五輪	今季一度も成功していないが、きれいに着氷。復活の瞬間に歓声がわく	S P後の立ち直りの早さなどメンタル面の評価
2月22日	朝刊・五輪	ベストダンスをすべての人へ フィギュア・浅田真央 ソチ五輪	世界トップクラスの滑りを支えるのは、常に上を目指す「努力」	努力家としての浅田を評価
	朝刊・総合	(ソチ五輪) もう迷わない、跳びきった 浅田6位 フィギュア	「私は何も(病気などが)ないのに、できないということは、絶対はない」 浅田にしかできない大技を決めた 佐藤信夫コーチ(72)と一から見直した確かなジャンプの技術があったからだ	他と比べることなく浅田を一人の選手として見ている
	朝刊・社会	(冬空に舞う) 満開、最高の私 真央、涙の4年結実 フィギュアスケート ソチ五輪	我慢しながら1回転を続けた成果がようやく実を結ぶ 「自分への新たな挑戦」で、3回転半も、ルッツも、サルコー	コーチの指導力よりも、浅田自身の努力や挑戦をする姿勢に焦点を当て

	夕刊・五輪	(結晶) 浅田は間違いなく勝者 ソチ五輪	も、迷いなく跳んだ 浅田真央はフリーの演技の後「うれしい。バンクーバーのリベンジはできた」とうれし泣きと笑顔をみせた。彼女は苦しみの極致に生まれる遊びを、最後にさわやかに遊びきったのだろう。間違いなく五輪の勝者だった。	ている 一人のアスリートとして、浅田の真の強さを評価している
	夕刊・五輪	ヨナも涙「心が身軽になった」 フィギュアスケート・女子 ソチ五輪	記憶に残ったライバルとして浅田真央(中京大)の名前を挙げ、「長い間比較され、競争したが、もう競争もなくなる。私たちのように比較され続け、競技した選手は他にいないはず」と感慨深げに話した。 また浅田がフリーの演技直後に涙を流したことには、「お互いに自分の国で最も注目を浴びたフィギュアの選手という点で共通している。選手の心情は私も理解できるし、浅田が泣きそうなときは私も込み上げてくる」とライバルを思いやっていた	キムヨナの言葉が、浅田がフィギュア選手として世界、自国のどちらにおいても特別な存在であることを示している。 また、ライバル自体を取り上げることが、キムヨナと浅田がお互いを高め合う存在であること、つまりお互いが自律していることを強調している。
2月26日	朝刊・スポーツ	「トリプルアクセル、外すわけには」 浅田真央 会見、主なやりとり ソチから帰国	—苦戦していたトリプルアクセル(3回転半)に挑戦しないことは考えなかったのか 「小さいころからずっと伊藤みどり選手にあこがれて、アクセルに挑戦しました。そしてこのトリプルアクセルは私自身を強くもたせてくれるものでもあります。私自身、トリプル	浅田の精神面を見極める質問を投げかけている。

	朝刊・社会	「森さんが後悔しているのでは」 浅田真央、来季は「五分五分」 ソチから帰国	アクセルが一番の見せ場だと思っていた。それは絶対に外すわけにはいかなかった」 森喜朗元首相が「あの子は、大事な時に必ず転ぶ」と発言したことをどう思ったかも海外メディアから質問された。「私自身、それを聞いたのは終わった後だった。人間なので失敗することもある。失敗したくて失敗しているわけじゃない」と言うと、「私は別になんとも思っていないですけど、森さんが今、少し後悔しているのではないかなと思います」。	答えにくい質問に対し、強気に解答している。
--	-------	---------------------------------------	---	-----------------------

図表 2-2-2-2. 浅田記事の分析（報道集中期②、読売新聞）

報道集中期②（ソチ五輪6位）2014年2月20日～26日				
読売新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
2月20日	東京夕刊・夕社会	ソチ五輪 真央 負けないで 「納得いく演技を」 ファン応援	得点を待つ間は、両手で軽く手を振るだけで硬い表情を崩さない。「55・51」の得点表示を見て、「フー」と大きく息を吐いた。「真央ちゃんスマイル」は、最後まで見られなかった。	「真央ちゃんスマイル」と表現。
	東京夕刊・夕一面	ソチ五輪 真央 まさかの16位 女子SPフリー「やるべきことやる」	今は亡き母親の匡子（きょうこ）さんは、「真央はもう、引退してもいいよね」と周囲に漏らした。そんな思いを振り切り、「ソチで金メダルを目指す」	親の思いを振り切り、自ら決意する浅田のエピソードを取り上げている。周囲からのプ

	<p>東京夕刊・夕社会</p>	<p>ソチ五輪 これが真央の強さ フリー自己最高 「私なりの恩返し」</p>	<p>と決めたのは自分。現役は今季限りと公言し、退路を断って追い込んできた。</p> <p>中学生の頃まで浅田を指導した山田満知子コーチは、「真央はバンクーバーで、やるべき仕事は果たした。ソチでは、自分のためだけに滑れば良い」とエールを送る。</p> <p>「明日は自分のやるべきことをしたい」。スケート人生の集大成としてのフリー。メダルの色や重圧から解き放たれて、「最高の演技」を披露する機会は、まだ残っている。</p> <p>感極まって涙を流した浅田選手。メダルには届かなかったが、最後は「真央ちゃんスマイル」もこぼれる納得の滑りだった。</p> <p>(中略)</p> <p>「真央ちゃん」という声援に、笑顔で手を振って応える浅田選手。リンク脇の控え席では、晴れ晴れとした表情で、フリーの自己最高得点「142・71」が表示されると、ファンが待ち望んでいたかわいらしい「真央ちゃんスマイル」を浮かべた。</p>	<p>レッシャーをはねのけて自分のために戦う浅田を応援している。</p> <p>“涙”、“かわいらしい”、“真央ちゃんスマイル”など、女性的な表現を多く使っている。</p>
--	-----------------	--	---	--

			<p>でやるなんてもったいない。自信があるプログラムなんだから、思いっ切りやりなさい」。舞さんはあえて心を鬼にして浅田選手を叱った。「家族だから厳しいことを言えるのは私だけ」との思いからだった。</p>	
2月25日	東京夕刊・夕社会	<p>充実の真央スマイル「3回転半 外せなかった」</p> <p>(中略)</p> <p>フリーの演技後、天井を見上げてこぼした涙については「不安や恐怖心を乗り越えて最高の滑りができたので、ホッとしたのとうれしさのあまり、本当は笑顔が良かったけれど泣いてしまいました」とはにかんだ。</p> <p>(中略)</p> <p>森元首相が20日、SPの演技を「ひっくり返ってしまった。あの子は大事な時には必ず転ぶ」と評したことについて感想を聞かれると、「人間なので失敗する。失敗したくて失敗はしない」ときっぱり。「私は何も思っていないけれど、森さんはああいう発言をしてしまったことを少し後悔しているのでは」と笑いを誘った。</p> <p>ソチ五輪を振り返って、「強い意志で諦めなければ、目指しているものができると感じることができた。今後の人生にも</p>	<p>氷上では涙をみせたこともあったが、この日は終始、和やかな表情で、「真央ちゃんスマイル」ものぞかせた。</p> <p>(中略)</p> <p>フリーの演技後、天井を見上げてこぼした涙については「不安や恐怖心を乗り越えて最高の滑りができたので、ホッとしたのとうれしさのあまり、本当は笑顔が良かったけれど泣いてしまいました」とはにかんだ。</p> <p>(中略)</p> <p>森元首相が20日、SPの演技を「ひっくり返ってしまった。あの子は大事な時には必ず転ぶ」と評したことについて感想を聞かれると、「人間なので失敗する。失敗したくて失敗はしない」ときっぱり。「私は何も思っていないけれど、森さんはああいう発言をしてしまったことを少し後悔しているのでは」と笑いを誘った。</p> <p>ソチ五輪を振り返って、「強い意志で諦めなければ、目指しているものができると感じることができた。今後の人生にも</p>	<p>インタビューで記者が浅田の涙の意味について触れている。</p> <p>森元首相の言葉をきっぱりと跳ね返している。</p>

			生きてくると思う」と締めくくった。	
2月26日	東京朝刊・2社	ソチ五輪 どん底から最高「充実の試合」 真央笑顔の会見	いつもの天真らんまんな笑顔を浮かべて質問に答えた。 (中略) 選手村では演技後、部屋で鈴木明子(28)、村上佳菜子(19)、高橋大輔(27)の3選手らとお菓子を食べるなどして楽しんだという。	社会面ではあるものの、“お菓子を食べるなどして楽しんだ”というスポーツとはかけ離れた話題を記事にしている。

図表 2-2-3-1. 浅田記事の分析 (報道集中期③、朝日新聞)

報道集中期③ (復帰後初の国際大会 GP 中国杯) 2015年11月5日～8日				
朝日新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
11月5日	朝刊・スポーツ	真央、一息つきながら週1回のオフ、情感が豊かに フィギュアGP 中国杯、あす開幕	「日本人として、すごく芯の強い女性を演じたいと思った」。 (中略) スケートへの心の持ち方も変わった。「たくさんの方が応援しているから、頑張らなきゃいけない」という気持ちがかみにつながっていたが、それが消えた。 (中略) 浅田のテーマは「自分を極める」だ。「結果も出しなが	浅田の心境の変化を細かく記事にしている。

			ら、自分の滑りたい、やりたいスケートをする」。	
11月7日	朝刊・スポーツ	真央、決意のSP首位 フィギュア・GP中国杯 6日	「失敗とは思っていない。このレベルまで来るのは、もうちょっと先かと思っていた」。初披露となったSPは、再び競技の場に臨む彼女の、いわば決意表明だ。 (中略) それでも浅田は前を向く。 「世界のレベルが高くなった。それに後押しされて、刺激をもらっている」。若手の台頭に真っ向から立ち向かい、リードする。2分50秒の演技に、25歳の覚悟が詰まっていた。	復帰後の浅田の強い決意や覚悟を評価。
11月8日	朝刊・スポーツ	真央V、重圧耐え抜いた フィギュア・GP中国杯 7日	「きょうのフリーに関しては、納得していない。結果的には優勝でも、私としてはまったく満足していない。もっと追いつかないと」。演技後も、硬い表情を崩さなかった浅田。目標とする「自分を極める」境地へ達するのは、まだ時間がかかるようだ。	フリーでは順位を落とした浅田に対しマイナスの評価をせず、結果に満足しない彼女自身の言葉を受け止めている。

図表 2-2-3-2. 浅田記事の分析（報道集中期③、読売新聞）

報道集中期③（復帰後初の国際大会 GP中国杯）2015年11月7日～10日				
読売新聞				
日付	掲載面	見出し	記事の一部抜粋	解釈的要素
11月7日	東京朝刊・スポB	フィギュアスケート・中国杯6日 真央 復帰	ジャズの名曲「すてきなあなた」の浮き立つようなり	“ガッツポーズ”、“変わらぬ存在感”から、

		S P 首位	<p>ズムに乗って軽やかに滑り終えた浅田から、ガッツポーズが飛び出した。「イメージ通りにできた」。舞い戻った勝負の銀盤で、変わらぬ存在感を見せた。</p> <p>(中略)</p> <p>女性らしく男性を誘うような滑りを求められたといい、表情を含めて今までにない雰囲気を漂わせた。</p>	<p>浅田の強さが読み取れる。</p> <p>“今までにない雰囲気”という表現から、女性らしい滑りというよりも、大人な滑りという点で評価しているようである。</p>
11 月 10 日	東京朝刊・スポ C	[視界良好]真央の背中が語る決意 編集委員 三木修司	<p>大人の滑りが、表現面のテーマ。それに応える一つなのか、浅田の背中は大大きく素肌を見せていた。浅田のコスチュームではかなり珍しいと聞く。ローズピンクと白い肌のコントラストはあでやかでもあった。</p> <p>(中略)</p> <p>昨年3月の世界選手権を終えて活動を休止した。海外旅行やショッピングの時間を楽しんだそうだ。しかし、休養だけでなかったのは、明らかだ。「大人」とは、色香やあでやかさの追求だけではあるまい。筋肉を鍛え、力強さを求めることも、25歳の若さなら当然でもある。</p>	<p>“背は大大きく素肌を見せていた”と女性的な表現を使うも、“筋肉”や“力強さ”という表現も用いることで、見出しである“背中が語る決意”に両者の意味が含まれるようにしている。</p>

4. 考察

まず、高橋と浅田のそれぞれの記事の特徴を考察する。

高橋の記事においてよく見られたのは、①監督との二人三脚、②“時代の変化”、③スポーツ以外の話題、の3つの特徴である。

①について、記事の中で何度も監督の言葉が出てくる一方で、高橋自身の言葉は少ない。また、監督だけでなく、父親とのエピソードも大きく記事にしている。これらのことから、主人公である高橋が小さく映り、周囲の男性に支えられてきたという印象を強く受ける。

②は、五輪銀メダリスト、ノンフィクション作家などにインタビューし、彼・彼女らに共通して出てきた言葉である。高橋の練習方法や“好きだから走る”という高橋独自のスタイルも、練習環境の変化や時代の変化によるものと彼・彼女らは結論付けている。また、五輪の陸上監督は「陸上競技の金メダルはベルリン五輪以来のこと。メインスタジアムのメインポールに日の丸を掲げるのは、日本陸連にとって、長年の夢だった。それをなし遂げてくれた」と言っている。このように、時代の変化や陸連の歴史という枠組みで選手を評価することは、高橋がそれだけの偉業を成し遂げたとも言えるが、もう少し高橋の能力や人格を評価して記事にすべきであったと思われる。

③は、主にショッピングや食欲旺盛な話といった女性ならではの話題である。また、アスリートとしての強さや泥臭さを語らず、軽やかに、しなやかにメダルを獲得したという表象の仕方は男性アスリートにはあまり見られないであろう。

一方、浅田の記事においては、①浅田自身の言葉の多さ、②エール、③精神面の評価、の3つの特徴が挙げられる。

①については、コーチや周囲のアスリートの言葉よりも、圧倒的に浅田自身の言葉が記事に使われている。浅田にも高橋と同様、コーチと二人三脚でやってきているが、佐藤コーチに関してはほとんど記事にされていない。

②については、浅田を身近に感じているようなメッセージ性の強い記事、浅田が不調なときでも、エールを送っている記事が多い。また、ファンからの声援やメッセージも多く記事にしている。

③を挙げたのは、浅田の苦境からの立ち直りや、自立心を評価する記事が多かったためである。

高橋・浅田の両者を比較すると、高橋の方がアスリートとして過少評価がなされているとの印象を受ける。有馬(p.117-128, 2012)が示したマスメディアが描く様々な女性アスリート像の項目のうち、(5) 男性に守られ導かれる女性アスリート、森田(p.95-96, 2009)も同様に示した、(1) 女性アスリートの「幼児化」「性愛化」、(2) 女性アスリートとその業績の「周縁化」、(3) 女性アスリートとその業績の「矮小化」、が高橋には当てはまると思われる。一方、浅田にはジェンダー的な描写が少なかった。しかし、新聞同士では記事の表現に多少違いがあった。読売では、高橋を“尚ちゃん”、浅田を“真央ちゃん”と女性ならではの表現を使っていた。

今回の論文では、女性アスリートに対する表象の内容は昔に比べて、現在では良い方向に

変わってきているという考察結果を期待していた。たしかに、上記のように各紙によって表象の違いは多少見られたが、2000年代に活躍した高橋と現役の浅田では明らかにジェンダー的な描写は少なくなったと結論付けたい。

5. おわりに

今回の論文では、2つのスポーツ、2人のアスリートのみを研究対象として比較分析を行ったが、まだまだ男性アスリートよりも過少評価がなされている女性アスリートは多いと考えられる。特に、高橋の記事で見られた、“周囲の男性に導かれる女性”という表象の仕方は、女性の社会進出が言われている現在では通用しないであろうが、男性性の強いスポーツで活躍する女性の表象や、男性がメインで女性は二の次と捉えられているスポーツにも注目しなければならない。

2020年の東京五輪を控え、今後さらに多くのアスリートが注目されることを楽しみにしつつ、メディアのジェンダー・フリーな選手の描き方に期待をしたい。

〈参考文献〉

- 有馬明恵「メディアとスポーツ」国広陽子編『メディアとジェンダー』勁草書房, 2012
森田浩之『メディアスポーツ解体』日本放送協会, 2009
橋本純一編『現代メディアスポーツ論』世界思想社, 2002
飯田貴子, 井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店, 2004
アン＝ホール(飯田貴子, 吉川康夫訳)『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社, 2001
江原由美子, 山田昌弘『ジェンダーの社会学 入門』岩波書店, 2008
渡部憲一『身体障がいとジェンダーにスポーツを読む』高菅出版, 2005
黒田勇『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房, 2012
井谷恵子, 来田享子, 田原淳子『目でみる女性スポーツ白書』大修館書店, 2001
滝口隆司『スポーツ報道論』創文企画, 2008
諏訪伸夫・井上洋一・齋藤健司・出雲輝彦『スポーツ政策の現代的課題』日本評論社, 2008

〈論文〉

- 飯田貴子「シドニーオリンピックにおける新聞報道の分析」, 『日本体育学会大会号』(52), p.216, 2001
飯田貴子「新聞報道における女性競技者の描写: 菅原教子から檜崎教子へ」, 『スポーツとジェンダー研究』1, p.4-14, 2003
飯田貴子「ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道」, 『スポーツとジェンダー研究』5, p.31-44, 2007

岩崎千恵子・小玉美意子「メディア産業におけるジェンダー構造とジャーナリズムの新たな地平」, 『マス・コミュニケーション研究』 45, p.64, 1994

梅津廸子「マスメディアにおけるスポーツ観の構成と偏向」, 『聖学院大学論叢』24(2), p.135-150, 2012

左近充輝一「女の涙に弱いスポーツ報道」, 『スポーツとジェンダー研究』 3, p.70-72, 2005

〈ウェブページ〉

日本オリンピック委員会「オリンピック憲章 2014」

<http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2014.pdf>

文部科学省「スポーツ基本計画 平成 24 年 3 月」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/04/02/1319359_3_1.pdf, 2014/09/28 アクセス

内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 平成 16 年度版」

http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h16/danjiyo_hp/html/zuhyo/fig01_08_06.html, 2014/09/28 アクセス

中央調査社「第 22 回「人気スポーツ」調査」

<http://www.crs.or.jp/data/pdf/sports14.pdf>, 2015/02/01 アクセス

中央調査社「第 12 回「人気スポーツ」調査」

<http://www.crs.or.jp/data/pdf/sports04.pdf>, 2015/02/01 アクセス

「浅田 真央オフィシャルウェブサイト」

<http://mao-asada.jp/>, 2015/02/01 アクセス